

小説の終焉

映画文学人生論

川西政明 (1941-)

『小説の終焉』 (2004) 「岩波新書」

『昭和文学史』 (1981) 「講談社」

『「死霊」から「キッチン」へ』 (1986) 「講談社」

『新・日本文壇史』 12010-12) 「岩波書店」

小説の主題は、一九七〇年代には書き終えられてしまったのか

川西政明『小説の終焉』によれば、「『浮雲』から持ちこした小説の主題は、一九七〇年代には書き終えられてしまった」。

小説の主題としては、たとえば、「私」「家」「性」「神」「戦争」「革命」「原爆」「存在」「歴史」などがあげられている。

そのうち「私」については、一九六八年、ノーベル文学賞の授賞式で川端康成が「美しい日本の私」を唱えたとき、「美しい日本」と「私」は終焉（しゅうえん）をむかえていたと川西はいう。

二葉亭四迷が日本初の近代小説『浮雲』を発表してから敗戦の日までが約六十年、敗戦の日から『小説の終焉』の二〇〇四年までが約六十年。この百二十年に多くの文士が小説を書いてきた。そして、主題を書きつくしてしまったのだろうか。

「私の終焉——最も個体的な自意識の最も個体的な行動」という章でとりあげられているのは次のような私小説の作品である。

徳田秋声 懺

志賀直哉 和解 城の崎にて 暗夜行路

瀧井孝作 無限抱擁

尾崎一雄 虫のいろいろ 夢蝶

美しい墓地からの眺め

藤枝静男 空気頭 欣求浄土 田紳有楽



小説の終焉

—— 映画文学人生論

明治維新が成立するまで、日本人には「私」がなかった。国家もなかった。維新後、日本は国家の体裁を整える必要があった。同じように小説を書くことで、日本人は「私」を書く必要に迫られたという。

そして、「私」をきわめる日本独自の小説の形態の私小説が誕生し、徳田秋声、志賀直哉、瀧井孝作、尾崎一雄、藤枝静男らの作家が「私」を確立して、「私」という主題を表現しつくした。

では、「私」とは何かがわかったのか、というとそうでもない。一九九二年、大江健三郎がノーベル文学賞の授賞式で語ったのは、「あいまいな日本の私」だ。そこには「あいまいな日本」と「私」があった。小説が「私」をきわめたとき、日本人のなから明確な「私」が消えていた。

川西政明は小説が好きで、四十数年間、毎日小説を読み、日本で小説を一番多く読んで一人だ。そんな読書人の批評家が、小説はどうやら終焉の場所まで歩いてきてしまったらしいと実感した。平成は十六年までの時点で、歴史に残る、小説の風向きを変える作品は書かれなかった。過去の歴史と比べてそう言える、と彼はいう。

主題は「私」——「私」とは何かがあいまいなまま小説が終焉を迎えてしまったというが、困ったことに、この「私」はまだ終焉していない。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

芭蕉